説教20201018テモテへの手紙 二2:1-7 　讃美歌24 21-452 386

説教　「安心して戦いなさい」

キリストよお越しください。弟子たちの中に立ち、復活の御姿を現されたように、私たちのうちにもおのぞみ下さい。

「あなたはキリスト・イエスにおける恵みによって強くなりなさい。」今日の主題はこのことです。

一方、今日の説教題も、この聖句から与えられました。「恵みによって強くなりなさい」ということと、「安心して戦いなさい」ということは、なにか似ているところがある様に思います。

先ず下の句の「強くなりなさい」、「戦いなさい」の方から見ていきましょう。聖書を始めから終わりまで見渡してみますと、そこに書かれていることは、戦いといいましょうか、葛藤に満ちています。悩み苦しみのあるところに、葛藤や戦いがあることは当たり前のことです。悩み苦しみを前にして、それを遠ざけてしまって、ごまかしながら暮らしていると、さらにひどい悩み苦しみにはまって行ってしまうということは、今の世の生き方によくみられることだと思います。

戦いというのは周りとの戦いでもあり、同時に自分との戦いでもあります。そこで私たちが全能なる神に寄り頼んで、様々な力や能力を頂いて、戦っていく、ということは実に御心にかなって、喜ばしい事です。聖書は一切あなた方は戦うことを止めなさいというようには語っていません。

例えば、今、木曜日の祈祷会で読み進めています、エステル記によりますと、アガグ人ハマンはペルシャ王を焚きつけて、帝国内の全ユダヤ人を絶滅させるというお触れを発令させました。それに対し、ペルシャ王の御きさき様となっておりましたユダヤ人のエステルは、宮廷内で口を閉ざしている道を選ばず、死ぬ覚悟をして王に直訴して、ユダヤ人の救済を目指そうとしたのです。もし、エステル妃が宮廷内で死ぬまで黙ってペルシャ王に従順に振舞い暮らしていたなら、当然彼女は死ぬまで、安泰に寝食に何不自由なくその人生を送っていくことが出来たでしょう。

彼女がその安泰の道を選ばず、死を覚悟しても王に直訴するという道を選んだというのは、実は、今の私たちにも大変身につまされる事柄を投げ掛けています。今の世の中では、死んでしまったら一巻の終わりだ、すべておしまい、という絶望感を多くの人が共有しており、そのため、死ぬということへの恐れがすさまじいのです。エステルはキリストが来られる前に生きたユダヤ人ですので、イエスキリストは知らなかったかも知れませんが、それでもクリスチャンと似た死を乗り越える救いの希望をもっていました。ですから、自分の命は今ここで死んでも、ユダヤ人たちが生きる、生き残るという道を選ぶことが出来たのです。そしてこのエステルのした選択というのは、今の私たちクリスチャンが日々の生活において直面させられている選択と同じなのです。

一方、ハマンのほうはどうでしょうか。彼は、そもそもユダヤ人モルデカイが自分にひざまずかず、敬礼しなかったということに対する、わたくしの恨み事から端を発して、ペルシャ王を焚きつけ、ユダヤ人が絶滅させられることになったのです。ここに私たちはハマンのもつ自己愛を見出すことでしょう。このときの自己愛というのは全く利己的であり自己中心的なそれです。見習いたくない心のもち方であります。しかし、私たちは冷静に他人事として評論する時は、そのように立派な判断を下すことをできるものですが、いざ、自らが危険にさらされ、危機に瀕した時には、知らず知らずのうちに自分のうちに隠されていた自己愛を顕わにして、それを行使してしまうという傾向を捨てることが出来ないのです。

私たちは、現実の生活においてハマンでもあり、またエステルでもあり得るのです。ですから私たちは、努めてまことの主なる神から、よい力と能力を頂いて、この世でエステルのような、よい戦いを続けていかなければなりません。

ここまでで、戦いにもよい戦い方と、悪い戦い方があるということがなんとなく分かってきました。そしてその、よい、に深く関わっているのが、上の句の「恵みによって」「安心して」ということなのです。「恵みによって」「安心して」というのはどんな感じでしょうか。イエス様に抱かれて、豊かに憐れみを受けて不安を感じることもなく、という感じでしょうか、まさにその通りだと思います。「安心して」というのはルカ福音書などで出て来る「安心していきなさい」という聖句からの連想で持ってきたのですが、「安心して」の直訳は「主の平和の内に」という意味です。平和というのは、私たちが毎週、この世への派遣に際して受ける祝祷で、主があなたに御顔を向けてあなたに平安を賜るように、といっているその平安のことです。安心していきなさい、というのはですから主の平和に抱かれて、安心してこの世の馳せ場へ出て行きなさいということです。

主の平和に抱かれて戦う、というのはどういうことでしょうか、それは平たく言えば、主の御前にオロオロしない、主の御前にカリカリしない、主の御前にいっぱいいっぱいにならないということでありましょう。

この地上には多くの英雄的な王様が現れました、ナポレオンやカエサルは太古の昔のアレクサンダー大王にあこがれ、彼のもつ力にあやかりたいと思い、又それを実行した人たちです。彼らは最終的に自分自身を神様と思わざるを得ない生き方をしました。ですから彼らのうちに主の平和はなく、彼らは英雄のように映りながらも、戦場から戦場へと駆け巡るその内実は、絶え間なく死への絶望にさいなまれていたのではないでしょうか。

さて、今日の聖書箇所の２節に「他の人々にも教えることの出来る忠実な人たちに委ねなさい」と言われています。パウロはこの信仰の継承が、神経を使うことであることを知っていました。心を尽くして、精神を尽くしてそして知恵を尽くして、事にあたらなければ、

私たちは信仰を次の世代に継承していくことが出来ないのだということを知っていました。

エステル記の例でいいますと、人間というのは放っておけばハマンのようになり、きちんと信仰を継承して行けばエステルのようになるということです。又人間は放っておいても、ナポレオンのような人物が又歴史に現れるでしょうけれども、クリスチャンの一人一人は私たちが、その信仰を教え、育んでいかないと育っていかないということです。

そこで、パウロは、その信仰の継承を現実化するために、三つの例を挙げて、私たちの理解を促しています。その三つのうちのひとつ目が、私たちがイエス様という王に献身する兵士であるということ、二つ目が、私たちは神の定めた規則に従う競技者であるということ、三つめは労苦を厭わず忍耐する農夫であるということです。

一つ目の献身する兵士ということですが、教会にあっては、私たちは献身という言葉を日々聞かされておりますので、その意味内容を思い描くことが出来ますが、この世の中ではどうでしょうか。私たちが、日常生活で献身という言葉を用いたくても、一般の人には意味が通じないので、その言葉を使うことをあきらめているかも知れません。しかし私たちはこの世の中でさまざなことに実際に献身をしています。マリアとマルタの例を引けば分かりやすですが、マリアはイエス様に献身していましたが、マルタはおもてなしに献身していました。ここでいう献身とは一意専心ということです。「わき目もふらず心を一つのことだけに注ぐこと」です。マルタはおもてなしに一意専心してしまったために、不平不満の気持ちを耕してしまったのだと思います。マルタは一意専心して献身すべき相手を間違っていました。私たちは、イエス様にこそ一意専心して献身すれば、まことの主の平和に抱かれて、安心して様々なことと戦い、身を処していくことが出来ます。４節に兵役に服するということが書かれていますが、わたしは兵役に服した経験がないので、それをリアルに語ることが出来ませんが、おそらく兵役に就いたものは、彼の上官に忠実に、一意専心して献身していくことでしょう。この世の戦争の兵役は悲惨なもので、あくまでここでは比喩的に語られておりますが、イエス様に一意専心する兵士としての私たちは、じつに幸いです。主の平和の内に私たちは既に入れられ、いかなる戦いの場に遭遇したとしても平和の内にそれを戦いきるすべを手に入れているのですから。

次に二つ目の、私たちは神の定めた規則に従う競技者であるというということですが、これは、フィリピの信徒への手紙3章１３節からにも出てまいりました。新約365ページです。「神がキリスト・イエスによって上へ召して、お与えになる賞を得るために、目標を目指してひたすら走ることです。」

つまり、私たちは、すぐ前に居られるキリスト・イエスにピタッとついて走り、その時が来れば、キリスト・イエスから、すぐに冠を授けられるようにいつも備えていなくてはなりません。この冠を授けられるということも、遠い場所での出来事ではないのです。今ここででも起こりうることです。

ですから、パウロは、競技に参加する者が、規則に従わず、競技から外れることを非常に戒めているのです。競技場を思い浮かべてみてください。それは、この世の外の場所と違って、多くの観客に囲まれた、ある意味衆人環視の場所です。手抜きはできませんし、逆に精一杯競技すれば、皆から賞賛と励ましを得ることが出来るでしょう。（競技場を離れたら、この世で好き放題に振舞っているというのもいただけませんが、）私たちクリスチャンはあまり競技場でアスリートになるチャンスもないかも知れませんけれど、この世の中でのすべてのステージを競技場に置き換えて暮らしてみれば如何でしょうか。

いじめ社会に身を置かざるを得ない時、又、ひとり静かに暮らしているとき、私たちはその人生において様々なステージを経験しますが、わたしたちはどんな時もイエス様と共にある安心のうちに、主の平和を得て、主の平和に抱かれつつ、様々な問題と戦っていくことが出来るのではないでしょうか。イエス様のまなざしは全てをお見通しで、しかもあなたを愛情をもって見つめていてくださいます。

そして最後、三つめは労苦を厭わず忍耐する農夫であるということです。前の兵士、競技者と比べて、農夫というのはどういう印象でしょうか。それは肉体労働であり、日々同じことの繰り返しも多く、兵士や競技者のようにひのき舞台や表彰台に立つといったチャンスもなくて、報われない労苦ばかりであるという印象を一般的に抱かされます。聖書もその報われないというイメージを前提として、ここに農夫の比喩を語っているのです。しかしイエス様のまなざしは、この世のそれとは全く違うということが示されています。イエス様は言われます。「労苦している農夫こそ、最初に収穫の分け前にあずかるべきである」と。ここに用いられている「べき」という語は、そこら辺に転がっている「べき」とは比べ物にならない程、重い意味あいが込められた言葉です。それは神の摂理を語っているのです。神の言われたことはそのとおりになるというのが、神の摂理です。ですからここを天地創造のように語れば、「労苦している農夫よ、あなたは一番最初に収穫の分け前にあずかりなさい」という神からの命令になるのです。イエス様はあなたの隠れた労苦をいつも見ておられます。そして、その労苦を決しておろそかにされず、それに応じた、新たな命の芽生えをあなたにお与えになるのです。

お祈りします

天の父なる神よ、今御前にこの兄弟姉妹を集められあなたの御言葉を聞くことの出来る幸いに感謝します

あなたはわたしたちの信仰が受け継いでいかれるように、忠実な人々に委ねるべきであると言われました。私たちは、その言葉の通り、兵士のように、競技者のように又、農夫のように、あなたに献身して、その信仰を身を持って人々に証していくことが出来ますように。そこでの苦しみが、やがてあなたによって喜びへと変えられることを待ち望みつつ、信仰の道を歩んでいけますように。

今の世の中で、私たちは吹き荒れる逆風に身を挺して戦っている状況ですが、あなたの御手に守られつつ、豊かに憐れみと祝福を頂きつつ、戦っていくことが出来ますように。

今、又、殊にヨーロッパにおいて新型コロナウィルスによる病、生活の困難、社会の困惑が広がっています。どうか多くの救いを求めておられる方々にあなたの御手が差し伸べられ守られますように。私たちが新型コロナウィルスに打ち勝つことが出来ますよう、知恵と力をお与えください。

召天者記念礼拝が近づいてまいりました。世を去った人そして世にある人々の主であるあなたが私たちを導き、共にあなたの祝福にあずかることが出来るよう整えてください。

父と聖霊と共に一体であって代々に生き支配しておられます私たちの救い主イエスキリストのみ名によって祈ります。